



日本出身関取による十年ぶりの幕内優勝のうちに、大相撲初場所が幕を閉じました。協会でも「生の相撲を観てみたい」という大使館の皆さんのご希望に応え、1月11日国技館で初場所二日目の取組を観戦してきました。参加者30名のうちロシア人が22名にのぼり、相撲への関心の高さがうかがわれました。

最寄りの两国駅は、降りるといきなり相撲一色。構内には歴代横綱の絵や手形が飾られ、朝一番に取組を終えた着物姿の若手力士が、足早に横を通り過ぎていきます。外に出ると目に飛び込むのは国技館入口を飾る何十本という相撲幟（のぼり）。正月の青空に映える色とりどりの幟に、気分は一気に盛り上がりました。

国技館に足を踏み入れると、そこはさながらテーマパークです。売店では関取のしこ名を冠したお弁当や相撲にちなんだお菓子・グッズを販売しています。おすすめは、国技館特製の焼き鳥。

切符のもぎりや警備を担当するのは引退した力士たちです。往年の人気力士に出くわすと、TDLでミッキーやドナルドを見つけた気分です。併設の相撲博物館では、11月に急逝された北の湖さんの追悼展覧会が開催中でした。ほかにも相撲部屋特製ちゃんこが振舞われたり、関取とのツーショットプリクラや遠藤関によるお姫様抱っこ顔出しパネルがあったり、国技館はそれ自体がアミューズメントパークのようでした。

参加者が三々五々に集まったのは、幕内土俵入り前の午後3時半過ぎでした。ほぼ最上階の団体席だったので表情まではわかりませんが、何とか動きは肉眼でも追えます。ロシア



の方々には高そうなカメラで細かい所までバッチリとらえていました。この日、対戦相手休場によりロシア出身の阿夢露関の取組はありませんでしたが、皆さん熱戦には歓声をあげ拍手を送り、生で観るお相撲を楽しんでいました。

観戦後、あるロシア人女性が「Как сказка!」と言われたのが印象に残りました。関取の大銀杏や神事に由来する土俵上の所作、きらびやかな行司の装束、呼出しの朗々とした声、観客席のどよめきや歓声。すべてが織りなす様式美は、外国人にとってはたしかに御伽話のようかもしれせん。古く美しい日本を少しでも感じていただけたなら、日本人として嬉しく思います。

今回は十分な説明・ガイドができませんでしたが、次回は早めに集まり是非「入り待ち」を体験していただきたいと思っています。間近で見る関取は小山のように大きくて、圧倒されること間違いありませんよ！

「日ロ交流」2016年3月号より